

## あとがき

井上円了博士（一八五八—一九一九）は、日本の哲学者の先駆けの一人であり、あの西田幾多郎も、円了博士の『哲学一夕話』に深い感銘を受けたという。円了博士は東本願寺系統の新潟の寺に生れたが、若き日、思想遍歴の末に哲学と仏教に真理を見いだすことになる。さらに宗門を脱出して教育活動に挺身しようと志し、特に哲学教育を通じて「知徳兼全」「独立自活」の人間を育成し、もって社会に貢献しようとして、私立哲学館すなわちのちの東洋大学を創建したのであった。釈尊・孔子・ソクラテス・カントを哲学の四聖人として哲学堂に祀り崇め、哲学の一般民衆への普及のために絶えず東奔西走するほどであった。

円了博士の哲学の最終地点は、『奮闘哲学』にある。そこでは力強い、どこまでも現実重視の、生命力にあふれた世界観が展開されている。この書の中で、哲学に「向上門」だけでなく「向下門」もあると説いたことも、円了博士の独創性を示している。経済学、法学、政治学等のいわゆる実学ではなく、哲学こそを人間形成の根本においた教育者は、当時ほとんどいなかった。その卓越した教育理念によって、古来、三田の理財、早稲田の政治、白山の哲学と並び称されたので

ある。

本書には、そうした円了博士の生い立ちと思想、哲学館運営の歴史、その後の東洋大学の展開などが、きわめて要領よくまとめられている。円了博士およびその後の大学運営に携わった方々が、いかに全身全霊を注いで哲学館ないし東洋大学の発展に努めてきたかが、生々しく迫ってこよう。

いったい、円了博士は哲学館の教育理念について、どのように考えていたのであるうか。このことについては、年を追って多少変化していくが、そのもつとも核心となると思われるのが明治二十二年十月十八日の「哲学館目的について」(長文)における説ではないかと思われる。円了博士は根本に国の独立を護るといふ精神を置き、行き過ぎた欧化主義に対し日本主義と宇宙主義(客観的真理、哲理)とを調和させるべきであるとして、次のように説くのである。

「……たとい日本なる名は存するも日本なる実は疾とくに天外に飛散してその形跡を認むべからざるに至らん。すでにかくの如くならばいづくもよく日本の独立を維持するを得んや。これ余の最も憂うる所にして、いわゆる日本(主義)大学は上掲の三者すなわち言語・歴史・宗教を完全に結成し、もって日本独立の基礎を堅固にせんと期するゆえんなり。……その裏面に入ればなお一の大なる目的あつて存す、これを名づければ宇宙主義ともいわんか。すなわち宇宙学理を研

究することこれなり。……

以上を概括して、哲学館の目的事業を函解を以て示せば、左（本書六十頁の図）の如くなるべし。すなわち表面よりは言語・宗教・歴史をもつて日本主義を構成し、もつて日本独立の精神基礎を確立し、裏面においては宇宙主義、すなわちあまねく宇宙間の真理もしくは哲理を研究するにあり。……」

ここで宇宙主義とあるのは、普遍的真理を重んじる立場のことである。なお、この二つに関して、けつして一方に偏つてはいけないということも注意している。

今日、グローバル化・ボーダーレス化が進む一方で混迷を深めている国際社会のなかにあつて、多様な価値観や行動様式等に柔軟に対応するとともに、自分の生まれ育つた社会の伝統的な思想・文化を尊重し、確固とした基軸を持つのでなければ、単なる根無し草になってしまうかねない。創立者の意を汲めば、我々東洋大学の学生・教職員は、ほかならぬ日本文化の国際的な意義について、大いに理解を深めていかなければならないはずである。と同時に、我々東洋大学こそが、日本の価値観に基づくグローバル・スタンダードを創造していく使命を担っていることを思うべきであろう。

本書の中、忘れてならないと思われるのは、哲学館以来の本学の授業の伝統が「知識注入主義」

ではなく、教員も学生も自由に討議しあうという「自由開発主義」にあるということである（本書百六十四頁等参照）。この教育もしくは学習のあり方こそ、今日、アクティブ・ラーニング等として切実に求められているものであり、我々東洋大学関係者は、この「自由開発主義」のすばらしい伝統を保持・展開していくと同時に、胸を張ってこの伝統を社会に訴えていくべきである。

平成二十四年には、創立百二十五周年記念の年を迎え、「未来宣言」を発するなど盛大に記念式典を修することができた。さらに平成二十六年には、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援（タイプB）」事業に採択され、以後十年間をかけて大学改革と国際化を徹底し、時代の要請に応えるグローバルリーダーを多く育成・輩出する課題を負うことになった。創立百三十年を超えた今、我々は来たる創立百五十周年に向けて、平成二十八年に策定された東洋大学ビジョン『Beyond 2020』をふまえ、遠大な構想を描き、具体的な計画を持って、本学のさらなる高水準化に取り組み歩みを着実に進めて行かなければならない。この時機において、我々は本書をていねいに読み込むことによってもう一度、円了博士の教育活動への深い御志を汲み直し、その実現を通して、東洋大学のますますの発展を期したいものである。

東洋大学

学長 竹村牧男